（別紙様式３）

令和３年３月３１日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　岡山県岡山市北区内山下２－４－６
管理機関名　岡山県教育委員会
代表者名　　教育長　　鍵本　芳明

令和２年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和２年４月 20 日（契約締結日）～　令和３年３月 31 日

２　指定校名・類型
学校名　　岡山県立和気閑谷高等学校
学校長名　藤岡　隆幸
類型　　地域魅力化型

３　研究開発名　　「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成

４　研究開発概要
本構想は、指定校が規定する「地域と協働する探究人」育成を目的とし、卒業までに身につけさせたい資質・能力「７つのチカラ」の向上を目標とする。そのために、（ア）各教科・科目における地域協働カリキュラム、（イ）地域協働デュアルシステムカリキュラム、（ウ）総合的な探究の時間における地域協働カリキュラム、（エ）各教科・科目等と連動する課外活動、（オ）（ア）～（エ）を支援する体制の構築の５点について研究開発する。

５　教育課程の特例の活用の有無　　無

６　運営指導委員会の体制

氏名	所属・職	備考
石原　達也	岡山ＮＰＯセンター　代表理事	
岡山　一郎	山陽新聞社編集局　編集委員室長	
神崎　浩二	岡山県経済団体連絡協議会　事務局長	
草野　浩一	岡山県総合政策局　地方創生推進室長	
徳岡　卓也	ベネッセコーポレーション　学校カンパニー 西日本教育支援推進部　中四国支社長	
前田　芳男	岡山大学地域総合研究センター　副センター長（教授）	

７　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者
和気町	町　長・草加　信義
和気町教育委員会	教育長・徳永　昭伸
和気商工会	会　長・川上　健二
赤磐市	市　長・友實　武則
赤磐市教育委員会	教育長・土井原　康文
赤磐商工会	副会長・中原　哲哉
備前市	市　長・田原　隆雄
備前市教育委員会	教育長・奥田　泰彦
備前商工会議所	会　頭・寺尾　俊郎

備前東商工会	会　長・横山　忠彦
特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会	理事長・國友　道一
岡山大学	教師教育開発ｾﾝﾀｰ副ｾﾝﾀｰ長・髙旗　浩志
和気閑谷高等学校	校　長・藤岡　隆幸
和気閑谷高等学校ＰＴＡ	会　長・國塩　尚志
和気閑谷高等学校同窓会	会　長・内山　　登

8　カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	江森　真矢子	一般社団法人まなびと代表理事	週２日６時間
カリキュラム開発等専門家	梅村　竜矢	和気町立和気中学校非常勤講師	週２日６時間
地域協働学習実施支援員	山本　葵	和気町地域おこし協力隊・支援職員	常勤
地域協働学習実施支援員	松穂　亜花音	和気町地域おこし協力隊・支援職員	常勤

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
県内先進実践校との連携・協力体制の構築					○		○					
運営指導委員会								○			○	

（2）実績の説明

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

地域と連携した教育活動を推進するとともに、和気閑谷高等学校をはじめとした地域協働先進校の取組の充実を図るため、次の取組を行った。

○　地域協働先進校の連絡協議会の開催（令和２年８月６日）

県教育委員会では、和気閑谷高等学校をはじめ、本県が定める適正規模（１学年４～８学級）を下回る１学年３学級の高校８校に対して、３学級規模の高校が地域との連携の在り方等を研究し、配置したコーディネーターを活用した地域との連携促進など、教育の質を確保した魅力づくりを図る高等学校魅力化推進事業（リージョナルモデル）を指定しており、これらの指定校の取組の充実を図るため、各指定校の担当教員及びコーディネーターを対象とした連絡協議会を８月に開催した。会の中では、和気閑谷高等学校と同様、地域と連携した教育活動を実施している他の指定校から、各校の特色を生かした活動内容やその成果、課題について共有した。その後、教員・コーディネーター別に分科会を実施し、指定校におけるさまざまな活動を企画・運営する上での工夫や課題、小中学校との連携・交流及び関係構築のプロセス、教員とコーディネーターの関わり方など、テーマごとに意見交流を行うことで、和気閑谷高等学校を含めた指定校それぞれの活動の参考となった。また、学校間の横のつながりも構築することができた。

○　地域と連携した「高校の魅力化」フォーラムの開催（令和２年10月26日）

和気閑谷高等学校をはじめとした、地域と協働した教育活動を先進的に実施している県内の高等学校11校の生徒が集まり、事例発表等を行う「地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム」を、ホテル「ピュアリティまきび」を会場にして開催した。本フォーラムは、和気閑谷高等学校を含めた地域協働先進校における取組の成果を、県下の高等学校間で共有し普及させることをねらいとすると同時に、地域協働先進校同士の学びの場と位置づけている。

フォーラム当日は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、生徒による発表と学校間交流（生徒同士の振り返り）の２種類に絞り、発表校11校を３グループに分け、一度

に集まる人数を少なくした上で実施した。また、発表校以外の会場での参観を行わない代わりに、発表の様子をオンライン配信し、全国どこからでも視聴できる体制を整え、全国の地域協働推進校へも案内した。生徒による発表では、高校が所在する地域をフィールドとした活動として、小学生との体験交流や地域の魅力発信のための広報活動、地域の課題解決に向けた学習など、特色ある取組について、スライドを用いながら説明が行われた。各高校の発表に対して、他校の生徒や引率教員、オンラインで視聴された方から、活動した際に大変だったことや、高校生が考える地域活性化のビジョン、地域の誇れる点など多くの質問が寄せられ、生徒自身が体験を通じて感じた考えを述べていた。発表後に行われた生徒同士の振り返りでは、地域と連携した活動が自分自身に与えた影響や気づきについて話し合い、生徒からは、人と繋がることの大切さを感じたり、自分の知らない世界を知ることで価値観が広がったりしたことなどを、多くの生徒と共有した。このコロナ禍で、多くの発表の場や交流の場が失われている中、対面とオンラインのハイブリッドでリスクを抑えつつ、多くの高校へ情報の発信を行うことができた。フォーラム開催後も、県教育委員会のホームページから当日配信した発表風景の動画が閲覧できるようにしている。

○　第１回運営指導委員会（令和２年11月６日）

〔内容〕・運営指導委員による「総合的な探究の時間」の授業参観
・事業説明（事業概要、和気閑谷高等学校の取組）、
・運営指導委員からの質疑応答及び指導助言

〔主な意見〕

・探究活動のテーマを、生徒の身近な題材や進路につながる題材に設定することで、深く物事を掘り下げるべき。
・現在活用している生徒一人一台端末の、更なる効果的な活用方法を検討すべき。端末の活用により、自由な発想で自由に活動する場を用意することが重要である。
・「地域協働探究」の実施方法について、生徒に責任感を持たせる仕組み作りが必要であり、その結果、生徒も一生懸命努力することにつながる。

○　第２回運営指導委員会（令和３年２月）

※　新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、書面会議にて実施

〔内容〕今年度の活動内容の報告

「各教科・科目」、「地域協働探究」、「閑谷學」、「課外活動」、「支援体制」、「その他」の６項目に分けて進捗状況及び成果と課題について報告した。

〔主な意見〕

・教員の理解や納得を深めるための機会設定やコーディネーターや教頭との面談、ワークショップ等による内部の理解浸透の取組が必要。（各教科・科目）
・和気町内を重点に据えつつ周辺自治体の企業にも広げることで業種を拡大し、実業高校ではない在り方を提示していくこともよい。（地域協働探究）
・地域学で地域課題の解決を考えて発表するだけでなく、実際の行政に反映するところまでいけば、熟度も上がるし、主権者教育にも直結する。（閑谷學）
・「聞き書き」は地域資源を残していく意味で重要な行為。note などのサービスを活用し、インターネット上に公開していくことも広がりになる。（課外活動）
・多くの人数が関わることによるメリット・デメリットがあると思われ、適正な人数、体制はどういったものか検討する必要がある。（支援体制）
・外部との連携に ICT などを利活用することを検討してはどうか。（支援体制）

②事業終了後の自走を見据えた取組について

ア　コミュニティ・スクールの導入

令和元年度に県立学校初のコミュニティ・スクールを和気閑谷高等学校へ導入し、これまで構築したコンソーシアムを、より地域と協働した学校運営が行われる体制に整備した。

イ　地域協働学習実施支援員の継続（コンソーシアム）

和気閑谷高等学校が所在する和気町との協定により、和気町から派遣された支援職員を地域協働学習実施支援員に指名することで、事業終了後も引き続き高等学校へ配置することが可能となり、学校における地域と協働した探究的な学びが継続できる。

③高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

・和気町職員の岡山県立和気閑谷高等学校における職員支援協定（H26～）
・岡山商科大学と岡山県立和気閑谷高等学校との高大包括連携に関する協定（R1.7～）

１０　研究開発の実績

（１）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
７つのチカラ育成の年間計画	シラバス・単元配列	作成		実施・検証								
学力向上に関する研究協議会								○				
パフォーマンス課題の実践報告				実践					掲載			
１年次生閑谷學												
・年間指導計画の作成と実施	作成	実施										
・探究手法を学ぶ	○	○		○		○		○				
・テーマ設定、地域での実践						設定	フィールドワーク	実践				
２年次生閑谷學		SDGs の達成に向けた探究活動										
・年間指導計画の作成と実施	作成	フィールドワーク	実施									
・就業体験実習				中止							○	○
３年次生閑谷學		探究活動										
・年間指導計画の作成と実施	作成	実施										
探究学習発表会				○					○		○	
・３年次生卒業探究論文集		(1・2年次引継会、3年次中間発表)				執筆			完成	(卒業探究発表会)	(1・2年次中間発表)	
本研究開発専用のサイト開設	随時更新											
学校設定教科・科目「地域協働探究」				検討				事前協議				
近隣高校等との探究学習交流		○			○	○		○	○			○
コンソーシアム及び各部会												
・学校運営協議会			○						○			○
・各部会				○				○			○	
・連絡会	今年度は未実施											

（２）実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

ア　コンソーシアム及び各部会

昨年度 12 月に学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を発足し、備前市・赤磐市・和気町を本校の地域と捉え、各自治体の首長と教育長、商工会議所や商工会、ＰＴＡ、同窓会それぞれの長や大学教授など各界の代表 15 名の方に委員を任命した。組織の実効性を伴うために、下部組織として小中高接続、産学官連携、高大接続という３つの部会を置いて、本研究開発の取組を円滑に進めるための実質的な協議を行うことができた。

イ　各教科・科目

各教科で作成した７つのチカラとつながる教科の長期ルーブリックをまとめたものを iPad で生徒に配布し示した。各教科で長期ルーブリックに基づいた単元ルーブリックを適宜活用し評価に用いた。授業改善については、岡山大学の髙旗浩志教授に指導・助言を依頼し、学力向上評価委員会を実施した。11 月 12 日の研究授業には全教員が参加し、「生徒同士のつながりを大切にする教室づくり」をテーマに、教科別グループで研究授業中の生徒観察をもとに生徒の成長や自分ならどうするかという視点で協議した。研究授業では外国語科で仮定法を古文の反実仮想と比較する教科横断型授業の実践も試みた。12 月実施の教員アンケートでは、今年度教科横断型授業を実施したのは３割程度であったが、「他教科の学習と関連づけるという意味では今後実践可能」とする回答が９割程度あった。成果物として学ぶ値打ちのある探究的な学習課題を核とした単元を創り、28 の実践報告をホームページに掲載している。

（URL： http://www.wakesizu.okayama-c.ed.jp/menu/0_toppage_menu/2_tyugaku/jyugyouissen_tyuugakuseihe.html）

学校設定教科・科目「地域協働探究」のシラバス及び年間指導計画等について校内で検討した。令和３年度３年次生からの運用に備え、産学官連携部会で引き続き検討し、部会主担当教員とカリキュラム開発等専門家が企業への聞き取り等をして受入側のニーズを探った。職員会議で「地域協働探究」に係る全体協議の時間を設け、現段階の決定事項と課題について校内の共通理解を図った。

ウ　閑谷學

１・２年次は探究に深まりを出すため、３年次は進路決定に生かすため、今年度から活動の区切りを変え、１年次生の後半から２年次生の前半にかけてグループ探究、２年次生の後半から３年次生にかけて進路に関わる個人探究をすることにした。また、地域での活動をつないでいくために、学年間での引き継ぎ会を行うことにした。

今年度は移行期のため２年次生が１学期のみグループ探究を行った。グループ探究では、昨年度２月に本校が主催した「多様な主体による協働会議」で地域の大人と高校生が話し合ったことを踏まえて、備前市・赤磐市・和気町をフィールドにした地域とつながる探究テーマを設定した。新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限され、地域の方と協働する学習が難しくなる状態になったが、協力的な地域の方のご厚意により、休校中の登校日にゼミごとに集まって活動を進めたり、オンラインで外部とやり取りをしたり、学校再開後には三密を避けてフィールドワークに出かけたりした。短期間の活動だったが、７月に引き継ぎ会を行い、２学期からは１年次生がグループ探究を行っている。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

ア　各教科・科目

合科的・教科横断的なパフォーマンス課題、地元の特長的な教育資源の活用、地元企業と連携した実習や本物に触れる体験を取り入れた単元開発など、社会に開かれたカリキュラム開発を目指し、学ぶ値打ちのある学習課題を核とした単元を創りホームページで公開した。

デュアルシステムカリキュラム開発については、２年次の夏期・冬期・春期に各５日間の就業体験実習を実施する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により夏期は中止し、冬期・春期のみを実施した。２年次就職希望者のうち 15 名が希望し、各５日間の就業体験実習を実施後に「学校外の学修」として各１単位認定された。次年度はこの 15 名が学校設定教科・科目「地域協働探究」（２単位）を履修し、２年次とは異なる事業所での約 10 日間の就業体験実習を行う予定である。

イ　閑谷學

生徒の探究学習の専門性や新規性を高めるため、探究学習を進めるプロセスにおいて、生徒が大学教授や大学院生等大学関係者、地元企業・自治体の従業員・職員等から適宜指導を受けられる体制の構築を目指した。グループ探究のテーマを２市１町に広げ、テーマ決めや中間報告会、最終発表会等で、多くの関係者に指導助言していただいた。また、普段の探究活動においても、外部講師が適宜授業に参加する体制が整いつつある。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

総合的な探究の時間「閑谷學」において、備前焼の普及をテーマに、備前市の作家に助言をいただきながら、備前焼に地域素材を生かしたもので色をつける試みをした。「商品開発」の授業で創学 350 年を記念するガチャガチャ商品として備前焼のマグネットを作成する際に、閑谷学の経験を生かしてこれまでにない新しい商品を開発することができた。

④地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム･マネジメントの推進体制

校内のコア組織である企画委員会が本校学校運営協議会の下部組織である３部会と協働してカリキュラムの内容について立案し、校内組織の地域協働プロジェクト推進委員会で協議し、学校運営協議会で承認する形で実施した。

なお、校内組織の企画委員会を隔週開催する以外に、２市１町の実務担当者と本校関係者とで構成される打合せ会「連絡会」を適宜開催する予定であったが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり実施を見合わせた。

⑤学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

企画主任は、学校運営協議会の日程を展望しつつ、下部組織である３部会から具体的な提案がなされるよう調整し、本研究開発を統括的に推進した。３部会主担当者及びカリキュラム開発等専門家と協議し、地域と協働するためのカリキュラムの改善策をまとめるなど本研究開発を主導する役割と、カリキュラム開発等専門家や行政・企業・大学等の各主体等、外部との連絡・調整に当たる役割を果たすことができた。

３部会主担当者は、小中高接続・産学官連携・高大接続の各部会に所属するステークホルダーのメリットと本校のメリットを両方生み出せるよう部会を運営した。特に高大接続部会で閑谷學テーマ設定の効果的な指導方法について協議したことは成果となった。

研究開発室は、学力向上推進の主担当として生徒の学習活動の改善を図るとともに、学力向上評価委員会においてその成果と課題をまとめた。

閑谷學・LHR 委員会は、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習実施支援員も出席する企画委員会が兼ね、総合的な探究（学習）の時間と特別活動の企画・運営、年次ごとの年間計画の管理を行った。各教科・科目以外の教育課程内の活動を連携し合って充実を図るとともに、次年度に向けて、活動の継続的で効果的な指導について協議した。

⑥カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付けについて

ア　カリキュラム開発等専門家

・江森真矢子氏

活動内容
企画委員会（隔週）の出席、報告冊子の執筆・編集
学校設定教科・科目「地域協働探究」について校内協議
高大接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議 ・閑谷學担当者と課題整理、次年度に向けての検討
学校運営協議会、運営指導委員会の出席
総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」の授業サポート ・２年次生のフィールドワーク先の調整 ・１・２年次生のテーマ設定に向けて講義 ・中間発表、卒業探究発表会の出席

・梅村竜矢氏

活動内容
企画委員会（隔週）の出席、報告冊子の執筆・編集
学校設定教科・科目「地域協働探究」について校内協議 ・職員会議に出席　新科目について説明と協議

長期就業体験実習について企業訪問 ・受入依頼　　・実習プログラムについてヒアリング
産学官連携部会の運営　・長期就業体験実習について協議
学校運営協議会、運営指導委員会の出席
総合的な探究（学習）の時間「閑谷學」の授業サポート ・１・２年次生の授業内容について担当者と協議 ・１・２年次生のフィールドワーク指導 ・中間発表、卒業探究発表会の出席

イ　地域協働学習実施支援員

・山本葵氏

活動内容
企画委員会（隔週）の出席、報告冊子の執筆・編集
１年次団（学年付）・進路指導課所属、英語研究部顧問
総合的な探究の時間「閑谷學」の授業サポート ・主に１年次生の「閑谷學」の企画立案、指導 ・１・２年次引継会、卒業探究発表会の企画運営
小中高接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議
学校運営協議会、運営指導委員会の出席

・松穂亜花音氏

活動内容
企画委員会（隔週）の出席、報告冊子の執筆・編集
２年次団（学年付）・教務課所属、英語研究部顧問
総合的な探究の時間「閑谷學」の授業サポート ・主に２年次生の「閑谷學」の企画立案、指導 ・１・２年次引継会、卒業探究発表会の企画運営
小中高接続部会の運営 ・部会主担当と会議内容について協議
学校運営協議会、運営指導委員会の出席

⑦学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

ア　MSC 評価（生徒）

学力向上評価委員会の多面的評価の一つとして実施した MSC 評価とは、最もよくあらわれた変化の略で、学習の当事者である生徒が評価する場として、２学期に授業における「一番重要な変化」について全生徒対象で調査した。

イ　７つのチカラアンケート（生徒）

12 月 22 日に実施した。閑谷學等の探究学習を通して、自らの進路について考え学びを深めたり、行動したりすることから学ぶ姿勢が身に付いたりしたと考えられる。もともと高い数値であった自分を理解するチカラ等も含め７つのチカラすべてが３年間で上昇するなど、本研究開発を通じた成長がみられる。

ウ　学校評価アンケート（生徒、保護者、教職員）

生徒・教職員は 11 月下旬、保護者は 12 月下旬に実施した。全般的に７～８割が肯定的な評価をしているが、「図書館における読書指導」については、教職員の約８割に対し、生徒・保護者は約６割であり、対象による差が見られた。「部活動の指導」については、全対象において肯定的意見が約６割で、他項目と比べ低い結果となり、今後の課題であると考える。

⑧カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

本校コンソーシアム（学校運営協議会）は、２市１町の首長など各主体において意思決定できる立場の委員が集まっており、本研究開発に係るカリキュラム開発を各主体が支援しやすい体制である。今年度も学科・系の特徴を生かした魅力的なカリキュラムづくりや来年度新設の学校設定教科・科目「地域協働探究」の在り方等について具体的な意見をいただいた。就業体験実習を行う「地域協働探究」については、産学官連携部会においても具体的な活動内容に関わる協議を行った。また、高大接続部会では閑谷學の意義と取組内

容の見直しをすることができ、当初の想定を超える大きな成果があった。

⑨類型毎の趣旨に応じた取組について

令和３年度以降入学生普通科協働探究系の中心科目となる「地域協働探究」について協議した。普通科協働探究系は２年次に５単位、３年次に６単位の就業体験実習を核とした「地域協働探究」を全員履修する。就職希望者のみならず大学や専門学校への進学を希望する生徒にとっても、普通教科の授業では学びきれない「体験」を重視した探究要素を持つ授業を履修することにより、学びのモチベーションを高め、将来の職業選択への関連付けや地域協働の意義を見出すことができる。

⑩成果の普及方法・実績について

前述のホームページでの実践報告のほか、今年度はコロナ禍であったが、県内外の学校訪問受け入れが７校延べ 27 名あった。（他県教育委員会を含む）

12 月の卒業探究発表会では外部からの参加は見合わせたが、多くの方に本校の教育活動を知らせるため、本校ホームページで発表会の様子を公開している。

（URL：https://www.youtube.com/watch?v=i_W9GaTJrfw&feature=youtu.be）

また、近隣高校や全国の高校との探究学習交流会（主にオンライン）に延べ 10 回参加し、活動発表や意見交換等を行った。

１１　目標の進捗状況，成果，評価

以下のとおり、コロナ禍のため外部と関わる項目は数値が下がっているが、目標を達成している項目も多く、進捗状況はおおむね良好である。

＜本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）＞

a 各教科・科目、総合的な探究の時間などにおける長期ルーブリックのレベル２以上の割合 75％（目標値 40％）閑谷學の年度末自己評価の結果。「c」と相関をはかる。

b 地元企業（３商工会、１商工会議所加盟）に魅力を感じ、就職する生徒の割合 40％（目標値 55％）就職者 38 名中 15 名が地元企業に就職した。

c 外部模試におけるＧＴＺのレベルＣ以上の割合 21％（目標値 34％）最終外部模試（１月受験）の結果。

＜地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）＞

a 各教科における研究授業の実施回数３回（６月、10 月、11 月）（目標値３回）数学科・地歴公民科初任者研修各２回、国語科・外国語科研究授業各１回の計６講座で実施

b 各教科の授業シートのホームページへのアップ回数１回（目標値１回）

c 外部の研究会・発表会などへの参加回数 19 回（目標値４回）

・ラウンドテーブル in 奈良（オンライン）　5/24　生徒２名、教員１名参加
・東京大学 COREF 連携瀬戸(OKAYAMA)新しい学びプロジェクト（オンライン）　7/16　教員２名参加
・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（高等学校における研究開発）」担当者会議（オンライン）　7/30　教員２名、カリキュラム開発等専門家２名参加
・グローカルリーダーズ summit in 飯野高（オンライン）　8/1　生徒７名、教員１名、カリキュラム開発等専門家１名参加
・高等学校魅力化推進事業（リージョナルモデル）連絡協議会（岡山県庁）　8/6　教員１名、カリキュラム開発等専門家２名、地域協働学習実施支援員２名参加
・SCH 西日本オンライン　9/26　生徒４名、教員１名、地域コーディネーター１名参加
・地域と連携した『高校の魅力化』フォーラム（ピュアリティまきび）　10/26　生徒４名、教員１名参加
・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット（オンライン）　10/30　教員１名、カリキュラム開発等専門家１名参加
・ユネスコスクール実践交流（オンライン）　11/14　生徒３名、教員１名参加
・ラウンドテーブル in 尼崎（オンライン）　11/21　生徒２名、教員１名参加
・SDGs ワークショップ（赤磐市役所）　12/1　教員１名、地域コーディネーター１名参加
・「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミット（オンライン）　12/8　教員２名、カリキュラム開発等専門家１名参加
・探 Q！RESAS 探究発表会（オンライン）　12/12　生徒１名、教員２名参加
・個を生かし集団を育てる学習研究協議会（オンライン）　12/26　教員１名参加
・課題研究発表会及び研究成果報告会（岡山城東高校）　2/3　教員１名参加
・岡山学芸館高校グローカル･SGH 課題研究報告会（オンライン）　2/12　地域協働学習実施支援員１名参加
・岩手県立大槌高校探究発表会（オンライン）　2/15　地域協働学習実施支援員１名参加
・グローカルリーダーズ summit in 飯野高（オンライン）　2/19･20　生徒３名参加
・未来航路課題研究発表会（岡山操山高校）　3/5　生徒４名、教員２名、地域協働学習実施支援員２名、地域コーディネーター１名参加

＜地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）＞

a ①本研究開発に参加する外部人材の参加延べ人数 74 名（目標値 93 名）
１年次閑谷學 17 名、２年次閑谷學 12 名、卒業探究発表会１名、コンソーシアム関係 44 名
②学校運営協議会の開催回数３回（目標値２回）
b 就業体験実習の受け入れを希望する地域の事業所数 36 事業所（目標値 40 事業所）

１２　次年度以降の課題及び改善点

ア　コンソーシアム及び各部会

コンソーシアム関係として 44 名の外部人材が関わり、本校の魅力化のために積極的な意見交換ができているが、全体として会議の開催回数が多く、出席者の日程調整や資料準備等に負担がある。次年度は年３回の学校運営協議会と３部会を継続するが、事業終了後も持続可能な組織にするため、次年度中に構成メンバーや会議の在り方を検討する。また、小中高接続部会と産学官連携部会については、２市１町の関係担当者と諸活動について相談する実務者レベルの「連絡会」を適宜開催することを試みる。

イ　各教科・科目

長期ルーブリックをより実効性のあるものにするため、各教科で指標を再検討し修正する。活用が進んでいない教科は、他教科の実践を参考に、生徒にとってわかりやすく、モチベーションを高められる評価指標を作る。また、教科横断型授業実践の取組を増加させる。

次年度は、普通科・キャリア探求科３年次就職希望者対象の学校設定教科・科目「地域協働探究」（２単位）が始まる。就業体験実習の事前・事後学習をより丁寧に取り扱い、内省からの気づきにより「体験」を「経験」に変えていく。また、令和４・５年度から始まる普通科協働探究系全員履修の「地域協働探究α」（２年次・５単位）と「地域協働探究β」（３年次・６単位）の内容の具体化、事業所の確保、地域貢献活動等の地域体験活動の実践について引き続き検討していく。校内の組織体制も課題であり、持続可能性を考慮に入れた組織作りをする。

ウ　閑谷學

次年度から閑谷學の発表会をリニューアルする。コロナ禍で密集を避けなければならない状況での地域への還元の方法も考える。閑谷學の活動においては、本事業終了後のコーディネーターとフィールドワークにかかる費用をどのように確保するかが課題である。また、閑谷學を活用した進路実現の実績を増加させ、地域と協働した探究学習の魅力を中学生や保護者にアピールしたい。

【担当者】

担当課	岡山県教育庁高校教育課	ＴＥＬ	086-226-7578
氏　名	神田　慶太	ＦＡＸ	086-224-2535
職　名	主任	e-mail	kanri-koukou@pref.okayama.lg.jp